「お母さん一人でないよ。子育てを楽しもうよ。」

—「地域に開かれた幼稚園」づくりの記録

樋口佳子（福島市公立幼稚園）
大宮勇雄（幼児教育）

福島の公立幼稚園の空き教室を使って始められた，就園前の子どもと母親が集いあって遊び，交流する会。その５年間の記録におさめられた母親たちの声や行動から浮き彫りになる，今日の子育て中の母親の「要求・関心」の特徴は，自己の子育てへの強い不安と，わが子への強い期待が交錯していることである。幼稚園教師の助力を得ながら，共通する悩みや思いを交流する中で，当初受身に見えた母親たちが自主的に運営するようになり，それと並行して子どもを見る目が確かなものになってきた。

同じ年頃の子どもをもつ同世代の母親たちが集い，子どもの姿を直接見聞きしながら，子どもの成長や教育について語り合うことができる幼稚園は，今日の子育て支援の機関として大きな可能性を持っていることが明らかになった。しかしそのためには，幼稚園教師が親との間で，ふだんから子どものことを肯定的に語りあう関係を作る意識的努力や，率直に意見を言い合うためのコミュニケーション技術がこれまで以上に求められている。

〔キーワード〕地域に開かれた幼稚園，幼稚園と家庭の連携，教師のコミュニケーションスキル

1　本稿の目的

1993年４月，福島市内のある公立幼稚園の空き教室を利用して，幼稚園入園前の３・４歳の子どもたちが集まってみんなで遊ぶ自主的なサークル「こぐまの会」が誕生しました。母親たちの「幼稚園に入る前の子どもたちに友達がいなくて困っている」というつぶやきをきっかけに生れたこの会は，発足当初は口コミで集まったわずか10人の母親の手で，月１回の開催ということで始まりました。その後，資料１「こぐまの会の経過」に示したように，その年の内に30名近くに広がり，年々参加者が増えるとともに，開催の頻度も月１回から週１回，２回へと増えていきました。さらに，６年目の1998年度からは，２・３歳児を対象とした週２回の「こぐまの会」とは別に，毎日開く４歳児のちゅうりっぷ組を独立させることになったのです。そして今日では，このような取り組みが市内の数箇所の公立幼稚園にも広がり，「地域に開かれた幼稚園」の一つの具体的なモデルとして受け入れられるようになってきています。

この公立幼稚園の園児は，１年保育の５歳児が10数名しかいないことを考えると，このように急速に広がっていった背景には，幼稚園という教育機関に向けられている新しい教育要求の高まりがあるように思われます。その教育要求は，もちろん２歳を過ぎた子どもたちに友達と遊ぶ機会を用意してやりたいという「子どもの発達への要求」を基本的な内容としていますが，と同時にその背後には家庭での子育ての不安や悩みが広がっていることも大きく影響しているように感じられます。

この報告の第一の目的は，この取り組みを通じてはっきりとしてきた，子育て中の母親の「今日的要求」とはどんなものなのかを明らかにすることにあります。この「今日的要求」というのは，単に幼稚園入園前の母親に限っての要求ではなく，幼稚園に子どもを通わせている親に共通する要求でしょう。その要求の内容を明らかにすることで，今日の幼稚園に期待されている新たな役割がより明確になるでしょう。

報告の第二の目的は，母親と幼稚園教師との連携のあり方について，この取り組みが示唆するところを解明・整理することです。

今日の母親の価値観や生活感覚は，社会の急速な変容の中で大きく変化してきており，それだけに幼稚園と家庭との連携や相互理解のむずかしさが言われています。一方では園と親との「共育て」がますます必要になっている「子どもの育ちの現状」があるのだけれど，その「共育て」関係を作る上での土台となる子育て観や生活感覚の一致が，自然にはできにくくなっている状況が生れているように思われます。とすると，今日の幼稚園の教師には，これまでよりもっと意識的に，親との「共育て」の関係を作る力が求められるということになるでしょう。幼稚園と家庭との今日的な連携という問題に，幼稚園教師の関係づくり（コミュニケーション）能力という視点から迫ってみたいというのが第二の目的です。

2 「子育ては楽しく」と思っていたけれど
—母親が求めているもの—

1993年，この幼稚園に私が転勤してきた時，22名の5歳児がいる一クラスだけ。それまで勤務してきた幼稚園が，その地域の子どもたちはほぼ全員が公立幼稚園に通園していて，クラス数も多いときには3クラスもあったことに比べると，ずいぶん園児数が少なく，少子化の影響なのかなと考えこんでしまいました。

しかしその後，地域には公立幼稚園に対する切実な要求があることを思い知らされることになりました。

その年の10月，福島市内の公立幼稚園があるすべての地域で，公立幼稚園の2年保育を求める署名運動が起こりました。実現できたらどんなにすばらしい事かと、私たちは期待しながら地域の方々の動きを見ていましたが，それに取り組んでいる地域の方から，2年保育を待っている子どもが大勢いること，そしていろいろな悩みや要望を持っているお母さんたちの次のような声をじかに聞くことができました。「近くの公園に行っても子どもがいないんだよ。」「どうやって子どもと遊んであげたらいいのかわからないし，つい面倒になっちゃう。」「家の中にいるとイライラして，つい怒っちゃうんだよね。あーまたやっちゃったとあとで思うんだけど。」「静かにしていてくれれば良い子なのに。」「友達も少ないし，子どもに自分の時間を全部取られちゃう感じ。」「言っても，ちっとも言うこと聞いてくれないし，頭にくるときの方が多いよね。」などなど。

このような声に接する中で，一つは，地域的に転勤の方も多く，地域にいながらも公立の幼稚園があることも知らない方が多いことに驚きました。しかしもう一つ強く感じたのは，今のお母さんたちの子育てに対する感じ方や意識が，自分の子育てのときとはかなり違ってきているということでした。

私自身がわが子を育てている時には，子育てはなんて楽しいんだろう，子どもの成長にじっくり付き合える時期は今だけなんだからいろんなことに積極的に参加していこうと思いながらいたのと比べると，ずいぶんと子育てに不安や悩みを持っていて，あまり楽しいという実感がなくなってきているように感じました。

なぜ，子育てが楽しくなくなってきているのだろうか。私は幼稚園のお母さんたちの姿を思い浮かべながら，その理由をいろいろ考えてみました。確かに，何かみんなで作って子どもにプレゼントしようと誘ってみたり，運動会のはちまきやぞうきんを手作りで作ってくださいとお願いしたりした時，なかなか積極的に参加してもらえなくなっているなあと感じていました。そうした「消極性」の背景になっているのは何でしょうか。

一つは，自分と他人をいつも比べているためか，自分が自信がないことには手を出そうとしない傾向です。そんなふうに，自分の子育ても他の人と比べてしまったら確かに自信がなくなって，楽しいというよりも苦行になってしまうだろうと思いました。もう一つは，自分の手で何かを作ったり，みんなで何かをやり遂げたりする経験が，少なくなってきているのではないかということです。折しもお母さんたちの青春時代は，バブルの絶頂期，子どもたちの装いだけでなく，お母さんたちの服装もまるでファッション雑誌から抜け出してきたようにきれいになりました。そのこと自体は素敵なことですが，しかし反面，お母さんが手づくりでおもちゃや洋服を作ってやることが少なくなり，そういう時間を共有することで生れる親子のふれあいの密度が薄くなってきているように感じられるのです。

「お母さん，今が一番楽しい時期じゃないの。子育てを楽しまなくちゃーね。」と，幼稚園のお母さんたちに言い続けてきたのですが，こういう声に接してみると，それだけでは具体性に乏しく説得力がないことに気づきました。実際の手助けになるようなことを，何か幼稚園でやれないかと思うようになりました。

そこで，幼稚園で遊びの場を提供して，友達と遊んでもらったらどうかと考えました。園児が帰った後に遊戯室で思う存分体を動かして遊んでほしいと，園長先生に月1回の遊びの場の提供をお願いしたら，快く許可を出していただくことができました。

3 母親の力でやり始めよう

名前を「こぐまの会」と決め，園児が早く帰る日を月1回午後1時30分から，「遊びましょう。みんなと遊ぶと楽しいね。30分位なら先生と遊べるよ。」よびかけ，10人のお母さんたちでスタートしました。

こうして出発した「こぐまの会」ですが，当初お母さんたちだけでは何をしてよいか分からず，わが子の行動だけが気になる様子でした。子どもたちもお母さんから離れられず，しばらくは遊んでいる友達を羨ましそうに見ていました。それでも，お母さん方はいろいろな人とお話しができるから楽しいと，母親同士の交流・話合いを楽しみに来るようになりました。

次頁の「紹介」文は，こぐまの会ができて3年目の1995年度のものです。この文章には，この会が友だちとの楽しい遊び・交わりの機会という「子どもにとっての意味」だけではなく，「母親自身がもつ要求＝交わりと語らいと成長への要求」が満たされる場として大きな意義をもっていることをはっきりと意識するようになってきたことが示されています。

そして，お母さんたちが自分自身の要求をはっきりと意識する中で，こぐまの会の運営を自らの責任でという積極性が生まれてきました。第4節で述べる母親の「子どもを見る目」の確かな成長をもたらしたのは，この自主的，積極的な運営参加だったように思われます。そこでこの節では，どのようにして母親たちが，

この会の主人公へ変化していったのか，そのプロセスをたどってみたいと思います。(「こぐまの会」の経過については，133ページ資料1参照。)

こぐまの会の紹介

三・四才児が対象です。
・子どもと一緒に体を動かし遊ぶ楽しさを知る
・子どものしつけやわからないことを井戸端会議の中で気軽に話が出来るようにする
・幼稚園の幼児との関わりを通じて，色々な子どもがいることを知る
・お母さん・おばあさんが中心となって，自分達で運営が出来るようにする

など親子で遊びに来ることで，お母さんも友達をたくさん作り，自分だけが大変ではなく「みんな同じなんだ」という気持ちを持ちながら，遊び方を教えてもらったり，子育ての悩みを話したり，気軽に参加できる会です。幼稚園の施設を借りながら，親子で楽しい時間を過ごしましょう。

1）不安と期待と受身の出発

10人の母親で出発した「こぐまの会」でしたが，徐々に口コミで広がり人数が増えてきました。そんなある日の様子を書き留めたものを以下引用します。ここにこの会が始まった当初のお母さんたちの心情が読み取れると思うからです。

「たくさんの若いお母さんがやってきた。

まず，玄関に置かれた靴を見てびっくり。一人の母親がそのままにして置いて行くと次の人も同じく脱いだまま。子どもも同じ。園児にはいつもきちんと靴箱にしまうよう指導してきたのに，あらあらどうしましょう。

一人のお母さんと目が合ったが，靴をしまうことはまったく念頭にないらしく，チョコンと頭を下げただけ。頭を下げてあいさつしてもらっただけでもいいとしなけりゃいけないか。でもどうしたものか・・。

そんな思いでいると，子どもの泣き声。どうしたのかと目をやると，横にいた子どもの持っているものがほしいと泣いている様子。その子のお母さんは，さっと我が子を抱きあげて別の部屋に行ってしまった。母親の叱る声だけがビンビンと聴こえてくる。

やっぱりほうっておくわけにはいかない。靴のことはまったく気づいていないようなので，放送で『迷子の靴がたくさんあります。自分の靴は，どこに置けばよいかお子さんと考えて見ましょう』と問題を投げかけてみた。母子で一緒に何やら話ながら直している。こんなときには，お母さんを褒める言葉かけが，効果てきめん。

先ほど，別室にわが子を連れていったお母さんのところに行ってみたら，わが子と悪戦苦闘中。聞けば，自分の思うようにならないとすぐ泣き叫ぶので，ふだんからどうしてよいか解らないとのこと。じっくりお母さんの話を聞いてみる。『みんなそうやって，聞き分けのない子に手を焼きながら，でも段々わけがわかってくることでほっとしながら，子育てしてきたのよ。でも，言い聞かせなくてはいけないときは，その場で話をする方がいいよね。何も，わが子が泣き叫んだからといって恥ずかしいことはないんだよ』そんな話をしていると，だんだんとお母さんの気持ちもちょっぴり落ち着いた様子。」

「『見ているだけでも良いんです。まず色々な子どもがいるんだという事を知ってください。自由に遊ぶ楽しさを感じて下さい。お母さんたちも自由にお話しながらどうぞ』と話すが，集まって何か教育的なことをしてもらえる期待感がお母さんたちの顔にはありありと。

母親ってかなり期待しているんだ。期待に答えられなかったら，『あの先生は，・・・』と言うのだろうな。しっかり自分の考えをもたないと流されてしまいそう。」

2）お母さんは子育ての話をききたがっている

自分の子育てを「どうしたらいいのかわからない」という不安と，幼稚園という教育の場で「何かやってくれるはず」という強い期待。まずどんなことから手をつけたら，お母さんたちにとって意味のある会になるのだろうか。

子どもたちが遊びに慣れて自分から動き出すと，お母さん方も暇になり、あちこちでおしゃべりを楽しそうにしています。色々な話題です。その会話の中に入って聞いていると子育ての不安は想像以上です。核家族で隣近所との関わりがないので，不安や心配事を聞ける人がいないのです。小さい子を連れて勉強や講演にでかけるのはむずかしいでしょう。

幼稚園の教養講座で一緒に話を聞く機会を作ろう。時間を見つけて，お母さんたちに，母親の先輩として子育ての話をしてあげよう。また，幼稚園の教育以外の仕事だけれど，今はそれが大事ではないかと考えました。

実際に自分の経験したことをもとに話をしてみると，お母さんの真剣な姿勢に圧倒されそうでした。話を本気で聞いているから，責任持って話をしないと納得しない。この繰り返しの時間が，先生の評価につながるのかと思うと緊張を覚えるほどでした。

幼稚園にきて，大勢の子どもの中でわが子を見ることで，よけいに自分の子育てに焦りを感じることもあるようです。もっと早くから，母親同士の関わりがあれば，少なくともわからないことや不安は，お互いに気軽に話ができるはずです。そういういろんな不安を

抱えたお母さんたちが，たくさんの人との関わり，話ができる場に，幼稚園はならなくてはいけないのだと，この時思いました。話ができ，何かを感じながら自分のできることを見つけ，母親自身が楽しみにして会にくるだけでも不安は少なくなっていきます。幼稚園の役割は大きいなあと実感しました。

3）誰が責任を持つのか？

「子育ての不安を回りの人に聞いてもらえる」「同じ年齢の子をもつ人との交流ができる」と母親同士の交流も深まり，また大勢の中でわが子を少し客観的に見る機会ができたり，幼稚園での5歳児の生活を見たりすることで成長の見通しも持つことができ，楽しく会を続けながら少しずつ子どもの見方やかかわり方が変わっていきました。

そんな時です。1995年年明けの地元紙にこの会の記事が載って，みんなで「パニック」になってしまったのは。

なぜって，新聞記事は，この「こぐまの会」があたかも公立の幼稚園が，みずからの園児獲得のための手段として5歳前の子どもたちを集めているかの印象を与えるものだったからです。市内の公立幼稚園には，他にこの様な会がないのになぜ？　私立幼稚園の園児確保にも影響するのではないか？などの誤解が広がりかねない状況でした。

こぐまの会は，あくまで母親たちの自主運営の会として出発したはずでした。しかし，お母さんたちの間にはややもすると，幼稚園の先生がやってくれるものという受身の態度があるように感じられることもありました。この新聞記事を契機に，お母さんたちの関わり方が積極的なものへと変わっていきました。

「先生に迷惑かけたら申し訳ない。」と言ってお母さんたちも自分たちの責任で運営していく必要を感じ始めました。「窓口は一つにして外部に対しては，責任を持って私が話します。」と責任者が出てきました。

そして，園長先生がきちんと対応してくれたのです。とても頼りがいのある園長先生です。私はこれを機に意欲が高まってきました。

発足したときには，事故やけがに備えてスポーツ保険にだけは入っておこうということになりましたが，それ以外の会の運営や幼稚園との関係などについては何ら明確なルールや書面もないまま経過してきたのでした。お母さんたちから会則を作ろう，幼稚園から園舎を借りていることについてもきちんとした書類を作って新たなスタートを切りましょうと確認しました。

施設借用の手続きといっても，市内の公立幼稚園では初めての試みでもあり，お母さんたちも戸惑うことばかりでした。その中で，お母さんたちは会長さんを中心に，いろいろな書類を集め自分たちの会にふさわしい書類を考えました。あくまで園の施設をお借りしているんだという気持ち，感謝の気持ちが伝わるような書面作りをしました。何度も何度もやり直しをしながら，一つ一つのことをみんなで確認し合いながらやっていく中で，次第に役員の方を中心に心を一つにしていく雰囲気が生まれました。

そういう苦労を共有する中で生まれたお母さん同士のつながり，それは私を大きく励ましてくれました。出来そうだ！お母さん方の力を借りれば，どんなことでものりこえていけそうだ。

以下に掲げるのは，責任体制が明確になった直後に，地域の町内会の回覧板に載せてもらった案内文です。「こぐまの会」は，こうして大事なことを再確認して力強く新たなスタートを切ったのでした。

> 町内会の皆様
>
> こぐまの会
>
> 私たち○○こぐまの会は，結成から１年が過ぎました。この会は，「○○幼稚園を二年保育にする会」が中心になって，幼稚園の施設をお借りして親子で遊ぶ会です。
>
> 一人でお友達のいない子，幼稚園に入るために待っている四才児の子，みんなお友達ができ，楽しんでます。今年も四月から，会員を募集をいたします。（以下略）

4）みんなで活動の仕方を考えよう。

さて，子どもたちの遊び会の内容についてですが，当初は家でやれるような遊びや簡単な体操などをやったらいいでしょうとアドバイスしました。幼稚園の行事（運動会・餅つき・発表会など）にも参加していろいろな活動を知るきっかけづくりをしたり，幼稚園主催の教養講座などへの参加も呼びかけていったりして，いろんな刺激や教材の提供に努めました。

でも，やはり「こぐまの会」の責任者はお母さんたち。もっとお母さんたちの力で遊びの会での活動も工夫しあって進めていけるようにしなくてはならないと考えました。

「慣れて来たからみんなで意見を出して，活動のし方を考えない？」と問いかけると，「私できないよ」「やったことないからわかんないし・・・」と，どうしても消極的な意見が多く出てしまいます。

他方，お母さんの中には，元保育者や教育に携わっていた方がかなり多く見られました。一面では，そういう経験の差を感じて余計に消極的になってしまうのかもしれないのですが，むしろそういう経験の差をプラスに活かすことが大事です。

「班編成にしてその中にバランスよく経験者をいれて，一緒に勉強しながら，活動していくようにしませ

資料1 「こぐまの会」の経過

年度	実施回数 時間 人数	実践内容 (母親が中心となって)
5年度	週1回 お弁当のない日 PM13:30～15:30 29名	○ 活動計画を作成 ○ スポーツ保険に加入 ○ 幼稚園の教養講座に参加(親子体操・手芸・講話) ○ こぐまの会会則作成 ○ 幼稚園行事に参加(運動会・餅つき会・発表会・見学)
6年度	週1回 お弁当のない日 PM13:30～15:30 36名	○ 誕生会をしよう ○ さつまいも畑つくり
7年度	週1回 お弁当のない日 PM13:00～15:30 25名	○ 幼稚園児と関わる時間を設ける
8年度	週1・2回 PM13:00～15:30 38名	○ 班を作ってお母さん先生誕生 ○ 幼稚園の行事に計画的に参加 ○ 幼稚園の環境整備を一緒に
9年度	週2回(火・金) PM13:00～15:30 52名	○ 体験入園4名実施 ○ 幼稚園児と1時間関わって ○ 運動会はみんなと一緒 ○ 8班作って交替で先生
10年度	週2回(火・金) PM13:00～15:30 2・3才児 42名	○ 4班作って活動
	毎日 4才児 15名 AM9:00～13:30	○ 2人のお母さんが先生 ○ 幼稚園施設開放の手続きや届け出作成

んか。」

こうして,1996年度からは,「先生」役を担当するお母さんを,数人編成の班に編成して,交代で遊ぶ会の「お母さん先生」をすることにしました。

その日の保育の中身については,一人一人のお母さんが,やる気を起こせるようにアドバイス。まず具体的な教材を提示し,できそうなものから意見をまとめてきた。2～4歳に適した教材の研究が,入り込んできて私自身も勉強をする機会になりました。幼稚園教諭としての意地があったのは事実です。見通しを持って行かないと大変です。

5) 言い分を出し合う

こんなふうにして自信を深めていったお母さんたち。すると,誰でもそうでしょうが,夢がふくらみ要求はエスカレートしていくものです。

毎年,話合いを重ねながら,いろんな点を改善していくことで,母親も意欲を持って会にかかわってくるようになりました。私自身が考えてきた「子育てを楽しいと感じるように,自分から進んでやっていく姿」にも次第に近づいた感触がありました。

お母さんたちが自主的に,意欲的になるということは,必ずしも「何も言わなくてもわかりあえるようになる」ということを意味してはいません。むしろ私の思い描いている形とはちがう意見も出されてくるようになるというのが実感でした。

たとえば,遊びの中身が,課題活動中心になってしまって,幼児がもっと自由に遊びたいと思っても制約されてしまっているのではないだろうかと感じたこともありました。母親自身が積極的に,何かをしてやろうという気持ちが強まってきた結果かもしれません。

また,「この会毎日でも良いよね。」「もっと活動時間を早くしてもらいたいね。」等と,会員が増える中でいろんな考えの方が,出てくるようになりました。

ちょっと待ってよ。幼稚園教育が主なんだよ。なぜこの会が出来たのか,その原点に戻りましょう。できること,できないことをはっきり断れる少々強い先生にならないといけないとも考えました。1度始めたら戻れないよ。

このようなときは,話合いを持ち,「できること・できないこと」を理解してもらいながら,母親の言い分を十分に受け止め,母親同士の本音を言い合う時間を持つことで解決の糸口を見つけるようにしていきました。「よく考えて」が生活の中で大切と,繰り返し言い聞かせてきました。

4 「子どもを見る目」の成長

1)「子どもを見る目の確かさ」の成長

会にきた当初,お母さんの口からもれるのはぼやきと不安ばかり。

「私から離れられずいつも一緒なんですよ。それに人前で話しも出来ない。あーいいなー。よその子どもさんは。」「みんな2・3年保育に行っているし,公園に行っても誰もいないんだよね。私もつまらなくて,習いものはまだ子どもも小さくて手はかかるからできないしね。」「おばあちゃんには気を使い,子どもでイライラして大変なことばっかりだよ。」

幼稚園に来ているお母さん方はつい1年前のことをこんなふうに話をします。

この会を始める前の私は,こういう声に対して,「お母さん,今まで育ててきたあなたの結果なのよ。」と叫びたい気持ちも少なからずありました。「人の子と比べてどうするの。子どもと一緒にいろいろな所へ行ったり,体を動かしたりして遊んで来た?自分でばかり話をしていなかった? できた時褒めてあげた? 感謝の気持ち持っていた? 規則正しい生活をしていた?」と問い返してみたい気持ちが。でも,子どもには罪はない,結果論なので言わない方がいいと押さえていました。しかし,この会の中でのお母さんたちは,その「子どもを見る確かな目」と「子どもにはたらきかける技」に磨きをかけ,大きく成長していきました。

その大きな変化の一端を，1998年度のちゅうりっぷ組の活動日誌に載せられたお母さんたちの「感想・記録」から追ってみました。(資料２)

これを見てみると，一つは，「子どもの姿」を手がかりにして，母親は子育てを深く学んでいくことがわかります。「ゲームをしていた子どもの姿を見て・・・先生が話していた意味がわかった。」と書かれているように，子どもと実際にかかわったり，いろいろな遊びをしたり，他の子の様子をみたりというふうに，実際に自分の身体を動かすことぬきには子育てを学ぶことはできないんだなと痛感させられます。

今日は育児情報が氾濫しているといわれますが，やはり実際のわが子，そして同年輩の子ども集団の中のわが子を見ることと，専門家や教師の話が聞けることを同時並行的に進めることが，子育てを学ぶ上ではもっとも有効だということができるのではないでしょうか。そういう点では，幼稚園が，母親に対して，その子どもを見る目やかかわる力を磨く上で果たすことのできる役割は計り知れないほど大きいのではないかと思われます。

もう一つは，母親が，子どもを見る確かな目を持ったときの「自信あふれる姿」です。「子どもたちは，自分ことは言われなくてもちゃんとでき，自分から遊んでいます。親が感心するほど，いろいろな面で成長できました。」と一人の母親が書いていますが，まさに子どもが「成長する秘密」を知ったとき，大人はワクワクするような「子育ての楽しさ」を実感するはずです。

資料２　ちゅうりっぷ組・活動日誌から

	出　来　事	母　親　の　気　持
1学期	○　母親は当番表や誕生表を作り始める。お母さんが気になっていた子もしばらくすると離れて遊びだした。	★　幼稚園でどんなふうに遊んでいるのか，友達と仲良く遊んでいるのかなど自分の目で見ていられるのは，「いいなぁ」と思った。毎日来るのは大変と思う。けどその分安心して送り出せそうです。
	○　当番の日，先生がいないと何をしてようか分からず困って，タンポポ組のまねをしていました。	★　自分の子だけで精一杯なのに他の子とどういうふうに接して行けばよいのか不安です。 ★　当番制で子どもたちの面倒を見ることが出来るかな。
	○　たけのこで遊んだ後，先生がたけのこを煮てくれた。手にはたけのこの匂いがついている。	★　家では食べれない子もいただろうに。 ★　何をして良いか分からず子どものいいなり。それでも何とかなるさぁ。根性でやるっきゃないさ。
	○　たんぽぽ組の子がままごとのガラスを割り，片付けをしているとお礼に来た。突然のことにびっくり。感動しました。 ○　魚釣りゲームでたんぽぽさんと縄張り争いでひともめ。喧嘩って大切だ。	★　ありがとうの言葉の重みを感じ感動しました。 ★　時間が余り何をしてよいか分からず思いつくままやったら何だか先生になった気がしました。 ★　ゲームをしていた子供の姿を見て，いろいろな子がいることが分かり，先生が話していた意味が分かった。
2学期	○　タクシー・バス・電車と本物に触れ，体験できて幸せです。	★　色々な所に連れて行ってもらい，疲れたけど，親も楽しめました。 ★　ポケモンごっこの為に帽子を作ってくれた当番のお母さん先生。すごいです。
	○　運動会にするリレーをした。１年違うと本当に走る格好も違っている。	★　１年の差は本当に違う。子供の姿から，先生が話ていたことが分かった。 ★　私たちの運動会という雰囲気が出てなぜかうれしい。遊びが見えるからだろう。
	○　ちょっとした喧嘩や，困って泣いている子がいるとき言葉かけをしてやると，仲なおりをしていたり助けてあげたりしている。	★　４才児は勝つことでないんだ。お話に添って気持ちが高ぶっている。
	○　さつま芋掘り，先生はつるも茎も全部利用する。	★　使える物はすべて，余すことなく子どもたちの帰る家に返す幼稚園だ。
	○　先生がお休み。どうなるかと思ったら，子どもたちもお母さん先生のお話聴いて，ドッチボールのゲームが出来た。	
	○　リース作りをした。自分で時間を見つけて全員がちゃんと作っていて驚いた。	★　このごろお片付けというと「いや」と反発します。「明日も遊ぶべ」と約束もします。胸が熱くなります。ちゅうりっぷ組になれてよかった。
3学期	○　朝来るとお母さんたちで，ストーブを囲み，話に花が咲いていました。	★　子どもたちは，自分ことは，言われなくてもちゃんとでき，自分から遊んでいます。親が感心する程，色々な面で成長出来ました。
	○　節分二人の鬼が来た。泣き出す子・かくれる子・逃げ回る子と大騒ぎのまめまき。	★　幼稚園で取れた豆・枝豆の茎・垣根のヒイラギのセットを持って帰って来た。「あの枝豆今までとっておいたのか」脱帽です。
	○　ウサギの当番の引き継ぎ頑張っています。修了式の当番のお母さん緊張。「ちゃんとできるかな。お別れの言葉覚えたかな。」	★　慣れたころにはお母さん先生が卒業です。寂しいです。慣れて来て雷も落とすことが出来ました。 ★　お母さんたち一人一人力が出せて皆仲良く締めくくれてよかったです。 ★　タンポポ組になれると言う期待が，生活の中に出ている。本当によかった。

2）幼稚園教師として親とどう向き合うか

「幼稚園は，園児を教育するためだけの教育機関ではない。それ以上にもっと大切な事がある。」と私が感じたのは，随分前になります。「以前の子どもとなぜか違う。なぜだろう。」「母親はもっと違う。」このような繰り返しをしながら，手探りで母親と関わってきました。考えて解決できるようなものではないことも分かっていました。今まで自分自身の経験してきたことを伝えられる場があれば良いのかなとも考えました。

母親の意見や考えは，聞いてみよう。その中で「どんなことを求めているのか，何に悩んでいるのか。」など聞きながら，受け入れてみる。それから自分の経験談を話してやると，お母さんの顔にホッとする表情が浮かんできます。時には，涙を流して理解してもらえたという安心感を示してくれることもあります。そのようなことがあると，教師と母親の関係はグーッと近づいてきて，教育効果にもつながって行くような気がしました。

また，何か不安なことがあって，こんなことではいけないと思っている，そんな表情のお母さんには，私の方からその不安な部分に直接触れてみる。

「どうしたの，お母さん。何か心配ごとがあるの。」「先生何でわかったの。」と驚いて，話を切りだしてくることもあります。そういうときは，ほんとうに真剣になって話を聴く事が必要です。自分の経験を交えながら，誰でもそんな不安をもちながらやっていることを話して，不安を取り除き，自信を持たせる言葉かけをすることでしだいに自信が出て，明るくなってくるように思います。（以上，樋口）

5　コミュニケーション技術向上のために

この記録を読んで私がもっとも強く印象づけられ，そしてもっと深く知りたいと感じたことは，幼稚園の教師と親たちとの間で，どんな会話が，どんな調子でなされたかということです。

日本の幼稚園を観察した，アメリカのある研究者は，日本の幼稚園における教師と親の関係は，言い合うことも少なく常に両者には笑顔がたえないことから，一見きわめて親密で良好な関係に見えるが，よく観察するとその「笑顔」は，お互いに自分の本音を隠して表面的な付き合いをしていることの表れであり，本当の意味での親密さは欠如していると述べています（Tobin 1989）。真剣に子どものことを話し合えば，そうそうニコニコばかりしてはいられないはずだ，という批判が，日本のすべての幼稚園に当てはまるとは思いませんが，やはり表面的な付き合いに終わっている場合がないわけではないと思われます。

この記録には，率直な話合いと，温かな相互理解と相互尊重の精神があふれています。誰かに話してみれば，不安や悩みの正体がはっきりしてきて，対処しやすくなるものですが，その「話せる誰か」を見つけるのが容易ではないのが現代です。以前の幼稚園と親との関係は，学校が求め必要とする価値観や教育観を，親の側が理解していることが，協力・連携の大前提にすえられてきたのではないでしょうか。言い換えると，教育観や価値観は，一致するのが当り前と考えられてきたのです。

意見や価値観がちがっても，たがいに子どものために協力し合える関係を築くためには，くいちがいを乗り越え，相互の理解と尊敬の念を深めていくことを可能にするようなコュニケーションの技術がこれまで以上に求められます。

欧米では，教師のコミュニケーション能力の重要性がよく指摘され，その技術向上のための様々な取り組みがなされています。たとえば，オーストラリアの保育学生向け教科書は次のように述べています。

「幼児期のプログラムにおいてもっとも重要な要素は，人である。プログラムに関わるすべての人の間に，肯定的で，成功的なコミュニケーションがなされているということが，決定的に重要である。（中略）子ども，両親，保育者との間によい関係を確立し，維持するということは，子どもセンターにおける保育者にとって中心問題である。観察し，計画し，組織するなどの他の技能の価値は，保育者がこれらの関係を発展させることのできる力に依存しているものである。同時に保育者は，保育者同士の間においても，子どもや親との関係においても，良好な人間関係を維持し発展させることに対して，個人的にも，集団的にも，大きな責任を負っている。こうしたことが，良質の保育実践の基礎にある原理であり，また子どもセンターが，その目的を果たすことを可能にしているものなのである。」（Faragher & MacNaughton, 1990）

そして，コミュニケーションを成功に導く最低限の条件として，①コミュニケーションの出発点でもあり，かつ最終的目的でもある「他者と自己に対する尊敬」，②「明確で，開かれたやり方で，自己を表現する能力」，③「他の人の意見を理解し，真剣に受け止める能力」，④「トラブルを解決し，不一致を調停する能力」の四つを挙げています。さらにこの教科書には，教師相互の関係・子どもとの関係・親との関係にわけて，上記の４つの条件が詳しく説明してあります。（資料３は，親との関係づくりのためのコミュニケーションのポイントとしてあげられている項目の抜粋。）

このオーストラリアの保育教科書は，子どもの第一次の養育責任者として親が有する権利と要求を正当に認めた上で，親の悩みや不安や怒りに対して，保育者が専門家の立場から「応える」―共感的理解と明確な説明をする―責任を果たすことを求めています。そしていいコミュニケーションとは，対等で，肯定的なトーンでなされる必要がある，なぜならひとりひとりの

「自尊心」を傷つけてはならないからだというメッセージが伝わってきます。

この「地域に開かれた幼稚園づくり」の記録には，この保育教科書には欠けている視点，つまり，どのようにして親が一つの集団としてみずからを組織し，その中で成長することが可能になるかという視点が貫かれています。この視点も加えて，日本における幼稚園と親との関係をコミュニケーションスキルの視点から整理することが，今後の課題として残されています。

（以上，大宮）

引用文献

Tobin, J.J., Wu, D.Y.H. & Davidson, D.H. (1989) Preschool in Three Cultures, Yale Univerusity Press

Faragher J. & MacNaughton G. (1990) Working with Young Children, TAFE

（1999年9月22日受理）

資料3　親とのコミュニケーションのポイント

自分の意見を明確に，オープンに述べる

- 「いい親」についての偏見や固定観念から自由になること。
- 専門用語は使わないこと。そういう言葉を使うことは，専門家が言うことについての理解の障害になるだけでなく，親を萎縮させて教師の話から何かを学びとろうとする意欲を減退させる。
- 事実に基づいて話すこと。特に，子どもに問題があるときは最も重要。教師は，必要以上に親を不安にさせたりしないように，そして親一人一人の要求を考えた上で，話をするやり方をマスターすること。
- もし，悪い知らせを言うときには，親がその問題を処理する方法についての提案を用意してから話すようにすること。しかし，どんな場合でも，親自身の考えを実行する余地を残しておくこと。
- 対等な会話を心がけること。教師はすべての問題に対して答えをもっているものでもないし，その時々の状況に見合った唯一の正解をもっているわけでもない。話をするときには，それが自分個人の意見なのか，園全体の見解なのかを明確にして話すこと。
- 必要なときはきっぱりと言うこと。できる限り親の意見に寄り添うことが必要だが，それができないような場合には，できないことをはっきりと述べ，その理由を丁寧に説明すること。

親の意見を理解し，真剣に受け止めること

- 親を理解するためには，親にとって子どもの問題は，何よりもさきに，そして何よりも強い感情を引き起こすことを理解する必要がある。
- 親が何かに怒りを向けているときには，教師は親の言葉からは意味不明なときでも，親が怒りをもった原因を想像してみること。自制心をなくさずに，怒った親とやり取りできる能力を身につけること。
- 親が何か心配ごとを抱えているときには，その原因を理解しようとすること。

親との意見の違いを乗り越える

- 園の考え方がはっきりしていない場合には，親が求めるようなことを実行するのが不可能かどうかについての判断は，教師が個人的に行うべきではない。
- 園として親の要望に添えないと決めた場合には，親を傷つけないようなやり方で，その理由を説明する必要がある。できれば，親に対しては親の希望を実現できる別のやり方を提案するのがいい。
- もし親との間の議論が白熱したときには，そして教師がうまく話合いを続けることができないと判断したときには，園長と話合いをするようにするのがいい。